

1 始めに

5月8日の全慰協理事会において、代表理事に選任され、理事長職を執ることとなった。大変なことを引き受けたものだと思改めて感じた次第だ。誰かがやらねばならぬ職務ならば、是非もない。最後のご奉公と思い定めて邁進するしかないだろう。

だからという訳でもなかろうが、母の特養入所に伴い、状況確認のために帰省した際に、鹿児島陸軍墓地や知覧特攻平和会館を訪問した。知覧は十連休後の平日というのに、観光バスもひっきりなしに、個人客も多数訪れていた。熱心に見学していたようだが、何を思ったのだろうか？

知覧特攻平和会館の写真を紹介しつつ、幾つかの私見を述べたい。

2 陸軍の特攻について

(1) 陸軍の航空特攻について

昭和 20 年 3 月 26 日米軍は沖縄の慶良間諸島に上陸し、沖縄本島上陸作戦への対応措置も焦眉の急となった。

日本軍は沖縄本島にアメリカ軍が上陸した 1945 年 4 月 1 日に「天一号作戦」を発動し、海軍は「菊水作戦」、陸軍は「航空総攻撃」という作戦名で九州・台湾から航空特攻を行った。地雷陸海軍の特攻が断続的に行われた。

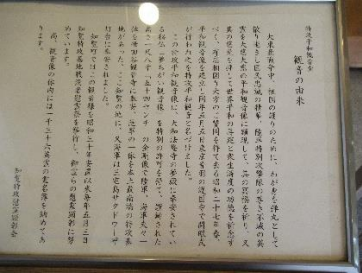
陸軍は、一式戦闘機「隼」が 250 kg爆弾を 2 発、99 式戦闘機は 500 kg爆弾を一発装着しての敵空母体当り攻撃を企図したのである。

知覧を含む九州からは第 6 航空群が振武隊を編成して、台湾からは第 8 飛行師団が「誠飛行隊」を編成して長駆沖縄近海の米艦隊を目標として特攻攻撃を行った。特攻戦死者 1036 名の内、439 名が知覧基地からの出撃であったという。

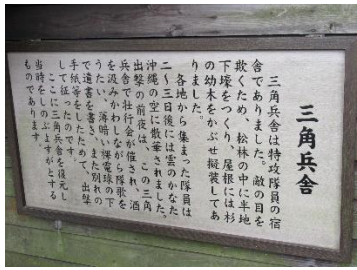
知覧は福岡大刀洗陸軍飛行学校の分校があった（昭和 16 年開校）が、本土最南端の特攻基地となったのである。

(2) 知覧特攻平和会館写真集





特攻平和観音像





下記の二枚は同館のパフレットからスキヤニング取り込みしたものである。



出撃前子犬と遊ぶ特攻隊の若校
【提供：朝日新聞社】



陸軍四式戦闘機「疾風」(1944年)

(3) 所見等

ア 国民挙って一度は同館を訪れて、当時の特攻に殉じた若者の想い、彼等を見送った知覧高女生や“鳥濱とめ”さんの想いに触れるべきだろう。

イ 必死の特攻は統率の外道であることを改めて銘肝すべきだ。

ウ 若者の死は無駄だったか？否、その神聖なる死があったればこそ、日本の現在がある。世界から尊敬されているのだ。若者の純粹性こそが救国精神である。

エ 遺書には母への想いが赤裸々に綴られて、慟哭なしには読み進めぬ。

オ 死に対する恐怖感があったのだろうが、愛する父母・弟妹・妻子のために命を捧げることに違和感なく、歓びすら感じている若者が大半だ。

カ 同館のパンフ掲載の写真など、明日死に行く者とはとても思えぬ、若者らしさに溢れて居る。そのような境地に如何にすれば達し得るのか？

キ 後に続く者を信じ、任務必遂が日本の勝利に幾何か寄与し、ひいては愛する者に益すると確信できたればこそその決死行だ。

ク 部下を特攻機として送り出した指揮官の苦悩も大きかったのは事実だ。高岡修氏編の「新編 知覧特別攻撃隊」（ジャプラン社）の 17p に以下の記事がある。

「しかし、ここにもっと哀しい一家の足跡があります。少年飛行兵の教育を担当した熊谷陸軍飛行学校の教官、藤井一中尉の一家の話です。当然のように藤井中尉の教え子が次々と特攻隊員として散華していきます。ひとりの教官として誠実であればあるほど、教え子の散華は辛いものです。「おまえたちだけを死なせはしない」と口ぐせのように言っていたという彼は幾度も特攻を志願いたします。ところが、藤井中尉はすでに三十歳が近くなっていました。そのうえ妻とふたりの子どもまでいたのです。そのような境遇の将校は特攻に採用しないというのが当時の原則でした。それをわかったうえでの志願だったのです。

藤井中尉の苦悩はとても大きかったのでしょう。そんな夫の苦悩が妻に伝わらないはずはありません。一九四四年十二月十五日の朝、「私たちがいたのでは後顧の憂いになり、思う存分の活躍ができないでしょうから、一足お先に逝って待っています」という遺書を残し、ふたりの女の子に晴着を着せ、飛行学校の近くを流れる川に身を投げたのでした。今では考えられない行為かもしれませんが、そのような尽くし方もあったのです。妻子のそのような死を聞いて、そのとき藤井中尉にどのような思いがあふれたのかわかりません。しかし、彼の特攻への意志はさらに決定的なものになります。彼はあらためて血書により嘆願し、軍もようやくその嘆願を受理するにいたります。

藤井中尉は第四十五振武隊に隊長として配属され、一九四五年五月二十七日に知覧飛行場に移動、翌二十八日に第 9 次航空総攻撃に加わり散華します。二十九歳でした。藤井中尉の妻子入水を知っていた隊員たちの団結はとても強固なもの、その戦果もまたみごとなものでした。」

ケ 北白川房子妃殿下の詠める歌

「清き名を とわにのこして 国のため 身をささげけむ 若きもののふ」
「いさきよく 風に散りにし 花のこと 御国のためと たた進むらむ」